

「先生、おぼれそうです」

ルカによる福音書 8章22～25節

女子聖学院中学校高等学校チャプレン 木戸 健一

イエスさまは弟子たちと共に、ガリラヤ湖の岸辺の町カファルナウムを中心に神の国の福音を伝えておられました。カファルナウムがあるのは、ガリラヤ湖の西側の岸辺です。ガリラヤ湖の東側には、その頃イスラエルの民はあまり住んでおらず、イエスさまはほとんど行っておられません。この時イエスさまは「弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸へ渡ろう」と言われ」ます。そして「船出し」ますと、イエスさまは「眠ってしまわれた」のです。イエスさまが何のために「湖の向こう岸へ渡ろう」とされたのか聖書には記されていません。別の箇所には、イエスさまは祈るために1人で山に登られたと記されていますので、祈るためであったのかも知れません。もしかすると、少し休むためにそうされたのかもしれない。

ガリラヤ湖はヨルダン川が流れ出る南の方以外の三方を高い山々に囲まれています。特に北の方には海拔2千メートルを超える山々が連なっています。海から2百メートルも低い所にあるガリラヤ湖に向けて、北の方角から突風が激しく吹きおろして来る時があります。すると普段は静かな湖が突然大荒れになり、舟に乗っていた一行は「水をかぶり、危なく」なってしまいます。しかもガリラヤ湖は東京湾の入り口の浦賀水道くらいの幅のある大きな湖です。沖に漕ぎ出していれば、簡単には岸まで戻れません。弟子たちは舟が沈んで「おぼれそう」になってしまうのです。そこで弟子たちは眠っておられるイエスさまに近寄って起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と叫びます。ガリラヤ湖で漁師であった人たちにも、どうしようもなくなっていたのでしょう。イエスさまが「起き上がって、風と荒波とをお叱りになると、静まって風に」なります。

イエスさまは弟子たちのおびえきった様子をご覧になり、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と問いかけられます。「あなたたちは今までに一体何を信じて来たのか」と問いかけておられるのです。ところが弟子たちは、イエスさまに向き合ってキチンと応えてはいません。ただ「恐れ驚いて、互いに言った」とあります。自分たちの恐れや驚きで一杯になってしまい、イエスさまの問いかけが聞こえていないのです。そして「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うとは」と自分たちで互いに言い合っているのです。このように弟子たちは、イエスさまがお命じになると、「風も波も従う」のに驚いて、「この方はどなたなのだろう」と思っています。ところがイエスさまが全能の父なる神さまの独り子であれば、信じるまでには至っていません。本当にそう信じているならば、突風と荒波のために死にそうになったとしても「先生、先生、おぼれそうです」とは叫ばなかったでしょう。イエスさまと一緒におられるのだから大丈夫と確信できたでしょう。イエスさまにすべてを御委ねて安心していられたでしょう。ところが弟子たちは突風と荒波に目を奪われてしまい、イエスさまを見てはいません。目に見える現実に心を奪われ、恐れに囚われてしまい、イエスさまがどのような御方なのか分からないのです。

イエスさまが全能の父なる神さまの独り子であられると信じて、イエスさまにすべてを御委ねし安心するには至っていないのです。

しかしイエスさまがよく分かってはいなくとも、できることがあります。それは弟子たちがそうしたように、「先生、先生、おぼれそうです」とイエスさまに訴えることです。死にそうになってしまった時に、「助けてください」とイエスさまに激しく呼びかけるのです。わたしたちは死んでしまいそうな現実の中で、弟子たちのように叫んで良いのです。いやむしろ叫ばなくてはなりません。一緒にいてくださるイエスさまを、眠っているからと言って当てにもせず、自分で何とかしようとして湖に飛び込んだりしてはいけません。「先生、おぼれそうです」と訴える時に、イエスさまは神さまの御子として全能の御力を、わたしたちに見せてくださいます。そしてわたしたちを恐れから解き放ってくださいます。イエスさまに激しく呼びかける時に、わたしたちはイエスさまを全能の父なる神さまの独り子であられると信じて、すべてを御委ねすることができるのです。

2018年9月8日 女子聖学院高等学校 高校チャペル礼拝